

# 平成 31 (令和元) 年度 第 1 回学校運営協議会・評価部会 議事録

神奈川県立横浜清陵高等学校

1 日 時 平成 31 年 4 月 20 日 (土) 9 : 30 ~ 11:30

2 会 場 県立横浜清陵高等学校 会議室

3 内 容

- ( 1 ) 開会
- ( 2 ) 学校長挨拶
- ( 3 ) 出席者自己紹介・教職員自己紹介
- ( 4 ) 平成 30 年度 学校評価報告書実施結果及び学校教育計画について
- ( 5 ) 平成 31 年度 学校評価報告書目標設定について
- ( 6 ) 質疑応答及び意見交換
- ( 7 ) 今後の予定および閉会

- [送付資料]
- ( 1 ) 平成 30 年度 第 3 回 学校運営協議会 議事録
  - ( 2 ) 平成 30 年度 学校評価報告書 実施結果
  - ( 3 ) 学校教育計画 (平成 29 年度 ~ 平成 31 年度)
  - ( 4 ) 平成 31 年度 学校評価報告書 目標設定
  - ( 5 ) 平成 31 年度 本校の取組について
  - ( 6 ) 平成 31 年度 年間行事予定表

4 出席者： 計 20 名

## 【学校運営協議会委員】

会 長	岡明 秀忠	明治学院大学 文学部 教授
委 員	田邊 克彦	元 神奈川県立総合教育センター 所長
"	芥川 綾子	横浜市南区福祉保健センター こども家庭支援課 清水ヶ丘保育園 園長
"	大久保 敏治	一般社団法人 みなと横浜改造市民会議 理事長
"	土野 顕一郎	株式会社 浜銀総合研究所 地域戦略研究部 部長
"	篠崎 孝子	山手学院中学校・高等学校 理事長・学院長
"	田中 顯治	横浜清陵高等学校 校長

## 【横浜清陵高等学校】

副 校 長	坂本 宏明	
教 頭	中村 和由	
事 務 長	村田 房江	
総 括 教 諭	中西 宏光	(企画広報グループ G L)
"	高橋 伸行	(学習支援グループ G L)

総括教諭	尾崎 宜孝	(キャリアガイダンスグループGL)
"	木下 教子	(生徒支援グループGL)
"	池田 玲	(生徒指導グループGL)
"	高村 正満	(管理運営グループGL)
教諭	飯田 純友	(企画広報グループ)
"	平崎 真麻	( " )
"	平本 美咲	( " )
"	船田 弘子	( " )

## 5 議事

### (1) 開会

(坂本)

平成31年度 第1回学校運営協議会・評価部会を開催いたします。

### (2) 学校長挨拶

(田中委員)

平成から令和になるという今年、本校は新1年次生が入学し、総合学科から年次進行型の普通科への完成年度となります。私は本校に赴任して以来、総合学科から普通科への改編に向けて努めてまいりました。普通科への改編につきましては、この間の本校の志願者数の増加から、生徒・保護者に一定の支持をされてきたと考えています。これからは、「進学に重点を置いた」学校づくりにむけ、教育活動の内容とともに、初めての普通科の卒業生が出る学年なので出口・成果も問われることとなります。

私は、平成31年3月31日をもって本校を退職しましたが、再任用として引き続き、本校の校長に任用されました。これまで目指してきた学校の完成にむけて生徒、県民の付託に応えていきたいと考えております。

この学校運営協議会・評価部会で得られたご意見を通し、PDCAサイクルを機能させ、学校教育の内容をよりよいものとしていきたいと思っております。短い時間ですが、今後の本校のありかたに関して忌憚のないご意見いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

### (3) 出席委員紹介・教職員自己紹介

出席委員の自己紹介

岡明 秀忠	明治学院大学 文学部 教授
田邊 克彦	元 神奈川県立総合教育センター 所長
芥川 綾子	横浜市南区福祉保健センター こども家庭支援課 清水ヶ丘保育園 園長
大久保 敏治	一般社団法人 みなと横浜改造市民会議 理事長
土野 顕一郎	株式会社 浜銀総合研究所 地域戦略研究部 部長
篠崎 孝子	山手学院中学校・高等学校 理事長・学院長
坂本 明子	横浜清陵高等学校 PTA会長 (欠席)
田中 顯治	横浜清陵高等学校 校長

## 横浜清陵高校職員より自己紹介

副 校 長	坂本 宏明	
教 頭	中村 和由	
事 務 長	村田 房江	
総 括 教 諭	中西 宏光	( 企画広報グループ G L )
”	高橋 伸行	( 学習支援グループ G L )
”	尾崎 宜孝	( キャリアガイダンスグループ G L )
”	木下 教子	( 生徒支援グループ G L )
”	池田 玲	( 生徒指導グループ G L )
”	高村 正満	( 管理運営グループ G L )
教 諭	飯田 純友	( 企画広報グループ )
”	平崎 真麻	( ” )
”	平本 美咲	( ” )
”	船田 弘子	( ” )

### (4) 平成 30 年度 学校評価報告書実施結果及び学校教育計画について

資料 2 「平成 30 年度 学校評価報告書」に基づき、坂本副校長から次の通り説明を行いました。

(坂本)

資料は、昨年度末の第 3 回学校運営協議会・評価部会でお示ししましたものに、委員の皆様から頂いた意見を「学校関係者評価」として加え、県の書式に落とし込んだものです。申し訳ございませんが、限られた中で、いただいた意見全てを掲載することができていません。

教育課程・学習指導の部分では、在県外国人生徒の支援体制についてご意見を多くいただいたところです。本校の在県外国人生徒については、今年度で各学年 10 名ずつとなり、今後も支援の改善をはかっていきます。また、新しい学習指導要領に向けての取り組みや「総合的な探究の時間」についての研究も行うことになっております。本校は神奈川県より「総合的な探究の時間」の研究開発指定校として指定を受けております。

生徒指導・生徒支援については、「自主自律・自他敬愛・自立精進」という学校目標のもと、基本的生活習慣の確立、遅刻防止指導や身だしなみの指導等を行い、ご指摘いただいたように一方的ではない生徒自ら考えさせることで規範意識を育てていきます。盗難の問題については、昨年秋以降起こっておりませんが、引き続き遵法意識の涵養をはかります。スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの利用もすすめるとともに、不登校への支援についても取り組みを行っていきたいと考えています。

進路指導・支援に関して、昨年度は、進路関係に具体的な数値目標を入れておりませんでした。数値目標だけがひとり歩きすることへの懸念は、先の会議でもご意見としていただきました。総合学科時代に培ったキャリア教育のノウハウを生かしつつ、上級学校からの講師や外部教育力をお借りしたキャリア教育を継続していきたいと考えています。今年度の方策については、後ほどご説明します。

地域との協働の取り組みについては、先般の会議後、整理をしたところ、あまりご意見を頂戴していなかったことに気づきました。今回はこれについて芥川委員からもご発言をいただけたらと思います。

学校管理・学校運営では、事故防止の点で、ヒヤリハットはあったものの、県全体でいくつか挙がった事故につながるようなものは、本校ではありませんでした。何か問題が起きそうな時に、横の連携をとることのできるような風通しの良い組織づくりをという意見をいただきましたので、そのような点を踏まえて成果と課題にまとめさせていただきました。

(岡明会長)

ご質問やご意見はありますか

(田邊副会長)

総合評価における文書表現では、「求められていると思う」「必要がある」「考えられる」といった文章はなじみません。改善方策なので、成果と課題をもとに、改善の具体性を書かなければなりません。はっきりと課題なら課題、成果なら成果、改善方策なら改善方策と書くことが求められています。また、県への提出前に全体を統括し、文章をまとめる必要があります。折角取り組んできた事が曖昧となっています。昨年度の課題が今年度の取り組みや改善方法にどのようにつながるかというの、もっとはっきり明示すべきだと考えます。ぜひよろしく願いいたします。

(岡明会長)

言い切ること、最後に全体を見て表現を統括すること、PDCA サイクルがみえるように今年度から意識されたらどうかというご提案でした。

#### (5) 平成 31 年度 学校評価報告書目標設定について

(岡明会長)

それでは、田中委員より平成 31 年度の学校評価報告書目標設定についてお示しください。

(田中委員)

副校長・教頭には最低でも「努めた」「努める」と記しなさいと指導していますが、全職員に行き届いていないのは、私の不徳の致すところです。文書表現が校内的に統一されていなかった点については改善していきます。前年度どのような取り組みをし、次年度どのように変えるかについては、まだ我々の意識が明確でないことがあったのかもしれませんが、そこで今年は、平成 29 年度に策定した 4 ヶ年の目標を具体的にどの程度実現できたかを、数値目標として示すこととしました。

教育課程・学習指導では、全年次において夏期講習を実施することとし、数値目標を夏季講習開講数 50%増の 30 講座、参加生徒 200 人とすることにしました。また、研究授業を行い、組織的な授業改善をさらに進めていきます。ここには記載しておりませんが、前年度から帝京大学高等教育開発センターと連携し、教員の授業改善の実践的な研修を行っています。授業評価では、結果生徒の授業満足度平均を 3.5(4 段階)以上とするとしていますが、科目によって満足度が低い授業があるため、この点について改善を図っていきます。また在県生徒の進学支援、進路保障も重要な課題です。進路関係では、3 年次の希望に応じた上級学校(大学・短大)への進学 80%・の進路実現を目指します。このため、進学に向けた様々な手立てを行います。

生徒指導・支援では、大きな変更点はありませんが、「取組の内容・評価の観点」の部分で、「生徒・教職員の規範意識を高める為の防犯・生徒指導・研修を行ったか」という項目があります。これについては今年度、既に警察の方による教員対象の防犯研修講座を行っております。また、PTA に関しても研修を行う予定となっております。生徒については、基本的な生活習慣の確立と身だしなみの指導の徹底があるわけですが、指導週間中はしっかりと指導に従うことができるものの、日頃から継続的に決まりを守れるかという点依然難しい面があります。生徒の理解の上で、時間厳守、挨拶励行、服装頭髪マナーの向上等を図り、指導対象を 50%減らすという設定をしました。生徒・教職員の規範意識を高めることが求められ、それは防犯にもつながっていきます。生徒一人ひとりの課題に応じた支援体制の充実を図り、適切な情報共有を行っていきます。

地域との協働では、例年どおり清水ヶ丘保育園や清水ヶ丘地域ケアプラザとの連携を行うとともに、ボランテ

ィアや貢献活動に対して全生徒が1回以上参加するとともに、自主的な活動実績を増やしたいと考えています。

学校管理・学校運営については、職員の不祥事防止に対する意識を高めるということで、私費会計等や定期テストに関わる事故0を数値目標として掲げております。

(岡明会長)

それでは学校評価報告書目標設定を補足する意味も含め、各グループから「本校の取り組みについて」の内容をお話しいただきます。

(中西/企画広報グループGL)

企画広報グループの活動は、学校説明会の運営を中心に行っています。今年度は学校説明会を9月と11月、12月に予定しております。来年度の入学者選抜基準の変更を考えており、場合によってはこれ以外にも学校説明会の機会を設ける予定ではあります。4月に入り、すでに今年度の学校説明会に関する問い合わせも寄せられており、情報発信を学校ホームページで積極的に行っていきます。

また、入学者選抜業務や学校運営協議会など学校外部評価の事務局を行っています。

今年度から新たに、保育園での保育ボランティアと単位認定が業務として加わりました。他方で、これまでに進んでいた総合学科関係の業務は、総合学科卒業に伴い、なくなりました。

(岡明会長)

残留生はいないのですか。

(高橋/学習支援グループGL)

学習支援グループの資料の「在籍数」の部分をご覧くださいと、4年次生はおりません。総合学科生は全て卒業あるいは進路変更となったという事です。今年度で普通科が3学年そろい、在県卒の生徒も各学年10名ずつ、全学年で30名となりました。新入生は男子が増え、女子との比率が逆転しました。これは学校が普通科となったこと、進学を重視しているということが影響したのではないかと考えています。

成績処理についてですが、成績関係のミスは減りましたが、出欠管理については連絡の不徹底による訂正が多いなど、未だ課題があります。

教科指導についてです。夏季講習は昨年度24講座募集をし、実際に開講されたのは20講座だったことから、今年度は前年比50%増の30講座と目標設定しております。今年度は3年次生が普通科であるということから、より上級学校受験を目指した難易度の高い講座を増やしつつ、1・2年次生に向けた基礎的な部分を補う補習講座を開講していけたらよいのではと考えております。

授業改善については、昨年度に引き続き「生徒による授業評価」で生徒の生の声をとりあげるとともに、授業評価で得られた数値的なデータを授業等に具体的にどのように生かせるのかを、次のステップとして考えていきます。

(尾崎/キャリアガイダンスグループGL)

キャリアガイダンスグループです。実力試験に関しては、昨年度、難易度の面で生徒の学力とのミスマッチがあり、モチベーションが下がった生徒が見られました。そのため、実力試験をベネッセ社のものからリクルート社へ変更するとともに、実力試験の回数も4回から2回に減らしました。学校での授業内容の理解度とつまづきの診断、サポートという視点で取り組みます。

また、前年度の反省として、授業時間確保の関係上、外部教育力の利用が難しくなったということがございました。この点で、実力診断後のフォローアップ体制を重視したプログラムとして、リクルート社のスタディサプ

りを1・2年次生全員に、3年次生は任意ですが導入します。生徒の利用状況等を鑑みて、学校でどのように支援していくことができるか、リクルート社・キャリアガイダンスグループ・年次等で情報共有をし、生徒の学習機会を保証できるような形に変更していきます。

#### (木下/生徒支援グループGL)

生徒支援グループでは、昨年度より生徒会報の発行を再開し、委員会活動や部活動など生徒会活動がより具体的にみえるようにしております。また昨日、体育祭の結団式が終わり、3年次生を中心に活動を開始しております。球技大会については、7月があまりに暑かったことから、今年度の行事予定を作成する過程で7月の球技大会を中止としておりました。しかし、生徒から反対の声が挙がっておりますので、回数について再検討中です。清陵祭では、毎年多くの方にお越しいただいています。今年度は、生徒の自主性に任せるだけでなく、企画をしっかりと考えさせ、どのようにして来訪者に楽しんでいただけるか、利益を出すのかなどより高いハードルを課して、より生徒が工夫を凝らすように指導していきます。

部活動については、普通科になったことで、特定の分野に突出した生徒が少なくなったように感じますが、様々な面で一生懸命取り組むことのできる仕組みづくりを行い、活性化させていきたいと考えています。

地域連携については、ボランティアを中心に活動を行っていますが、単にボランティアに関する情報を生徒に流すだけでなく、参加する意識をどのように育てるかというところに重点を置いて指導を図ります。

教職員対象の心肺蘇生法の研修を毎年行っているほか、今年度はアナフィラキシーショック対策の、エピペン講習会を実施しました。今後も生徒の安全面への配慮を引き続き行っていきます。

#### (池田/生徒指導グループGL)

生徒指導グループでは、基本的な生活習慣の定着を図るという観点から、頭髮指導などは例年通り行っています。頭髮指導については、ある程度生徒の間に定着してきており、指導対象となる生徒が減少しています。また、今年度から全学年同じ時間割・日課で学校生活を送ることになることから、朝の遅刻指導も足並みを揃えることができます。他方、学校に登校することができない生徒が、新1年次生のうちから見られるなど、学校への不適応をみせる生徒が増えています。家庭訪問を早い段階で行うなど、相談業務の改善を図ります。

特別指導件数は多くはないのですが、盗難等を警戒し、教員の校内巡回など予防的な意識を心掛けます。

なぜ、頭髮指導や遅刻指導が必要であるのか、生活指導を行う理由を生徒に理解させ、指導をすすめています。

不審者の被害案件も多く、近隣の警察と速やかに連携するとともに、何かあった際に生徒がすぐ教職員に相談することが定着するよう努めます。

#### (高村/管理運営グループGL)

管理運営グループでは、適正な私費会計の運用を通して教育インフラの整備を進めています。また、PTAと連携し、保護者の方々からの意見を学校活動に取り入れていくということを行っています。昨年度末で総合学科がなくなったことから、外部講師に対する支出が大幅に減っていますが、外部教育力をもっといれる視点も必要と考え、様々な部署に活動を呼びかけているところです。

また、今年度から環境美化活動についても取り組んでいきます。昨年度まで環境美化は生徒支援の担当でしたが、教育インフラに関わる事ですので、私共の方で取り組むことになりました。これについても、昨年度末で総合学科なくなったことから、帰りのHRの時間帯が揃い、毎日清掃活動を行うことができるようになりました。日常の清掃活動をいかに定着させるかという点で活動を模索しています。

また、校内の情報ネットワークの有効活用を図っていきます。生徒の安全を図る防災活動等についても継続的に取り組んでいきます。

## (6) 質疑応答及び意見交換

(岡明会長)

ここまでの、学校長の報告の補足がなされました。総合学科から普通科への転換に伴って、学校の仕組みの変化が進んでいるという印象を受けます。

(田中委員)

私が着任した当初は、清掃活動、服装・頭髪などに課題が多かったと思います。ここ数年、よい意味で「生徒指導が厳しくなった」というイメージを近隣の中学などで持たれているようで、実際、遅刻や頭髪等は改善してきています。一方で、生徒の外見的な部分ではない、内面的な部分の課題が増加しているのではないかと感じています。クラス替えによる環境の変化に対応できないとか、新たな友人関係をなかなか結ぶことができないということから進路変更に至るなどの事例が多々見られ、生徒の質が変化したという印象を持っています。総合学科時代の生徒には、強さや雑草性があったとも感じます。

(岡明会長)

授業の選択の仕方など、単位制は通常の全日制と基本的に同じなのでしょうか。クラス替えやクラスの同質性にとって、うまく活用できるような、単位制の利便はないのでしょうか。

(高橋)

1年次生は芸術だけが選択制となります。2年次生は選択の枠が2つありますが、あとは必修科目です。そして、3年生は自由選択科目が格段に増えるので、午前中は必修科目であとは選択科目といったようなカリキュラムになっています。1・2年次生はほぼクラスで動くことが多いです。

(岡明会長)

では、通常の全日制と大きくは変わらないという事でしょうか。

(田中委員)

本校は年次進行型単位制ですが、事実上は学年制と大きく変わらないと思います。

(木下)

お昼ご飯を誰と食べるのかなど、生徒の同調圧力が大きな問題だというのは、本校だけの課題ではありません。また保護者にも、不登校の生徒を無理に刺激しない方がいいという捉え方が広がり、現状を受け入れようという意識の方が多いという変化がみられます。

(大久保委員)

本質的な原因はなんだろうかと考えています。だからといって、ずっとクラス替えをしなければよいというわけにはいきません。社会に出た時に対応できないと思います。どのように解決にあたっていくか、学校ではどのようにお考えなのでしょうか。

(坂本)

少子化により、小・中学校時代から雑多な集団ではなく2クラス単位などの小集団の学年進行で過ごしてきた子ども達が多く存在しています。また総合学科時代から、同じ中学の出身者がいない、あえて地域の学校には行かないという選択で本校に来る生徒が多く進学してきていました。外向的な生徒が多かった総合学科時代と比較

すると、内向的な生徒が増え、生徒全体の気質が変化した印象を受けます。また、入学選抜で同じような成績で入学してきた同質性が強い集団では、皆自分のことで精一杯で、中学時代のように気にかけてくれる存在がないということもあるでしょう。担任を中心にレクリエーション等クラスに馴染めるような活動を行ったりはしているようですが、なかなか難しい部分もあり、大きな課題となっています。

(田中委員)

確かに、ここ2～3年で生徒の質が大きく変化しています。各個人がスマートフォンを持ち、SNSなどで友人関係を築き、学校で新たに無理をしてまで人間関係を築かなくてもよいという風潮が広がってきていると考えます。その典型的な例が、進路変更先として私立の広域通信制学校を選択する生徒が増えていることが挙げられます。私立の広域通信制学校はその点では非常に存在意義が高まっています。みんなで勉強する、部活する、経験するという一般的な公立高校からドロップアウトした生徒達の受け皿としてだけではなく、公立高校ではカバーしきれない生徒達が社会全体で多くなってきているという事はあるかもしれません。それほど、インターネット上のつながりが子ども達にとって大切な「現実」になっているのだと考えます。今後、中学校でもスマートフォンを持ち込んでよいという流れが広がると、義務教育の大きな変化につながるのではと思っています。

(木下)

年次進行型の単位制高校ということで、4年間でも卒業できない生徒も今後出てくる可能性があります。通常の学年制の高校であれば、欠時数がかさんできた時点で今後どのようにするのか本人と一緒に突き詰めるということが出来ますが、本校では何かしら単位が修得できれば2年次に進級することが出来ます。この場合、4年間や5年間では卒業必修単位を修得できないかもしれないという先が見えない状況に陥ります。このため、早々に進路変更を考える生徒も多くいます。

学校集団の同質性・同調圧力を乗り越えるには、トレーニングしかないと考えます。絶対に自分を傷つけないことから、大人である先生やアルバイト先の人とは話すことが出来ますが、同学年の生徒とは話すことができないという意識をのりこえて、人と接する力をつけさせる練習をしていくしかないのではないのでしょうか。

(岡明会長)

自分自身の高校時代の経験からも、そうだと思います。

(田邊副会長)

何でも話していいのだという環境をつくり、子ども達に自信をもたせることが大切なのではないのでしょうか。もちろん本校でも実践されているとは思いますが、効果はないのでしょうか。自信がないからこそ、他人と交わることができないと考えます。同調圧力に対して同調する必要はないのだという指導は、なかなか難しいとは思っています。

(岡明会長)

総合学科時代のある種の緩やかさから、普通科になった所で校則が厳しくなってきました。「校則を守る」というのも、ある意味では同調圧力がかかってくるのだと思います。過渡期なのではないのでしょうか。教員側も我々もそうですが、温かく見守っていくしかないのではないかと思います。私も、大学の最初の授業はラポールだと思っていますので、できるだけ自己紹介をさせ、学生同士の関係性の糸口を見つける授業をしています。子ども達に糸口が見つかるような場面ができないと、「私・僕がいてもしょうがないのかな」と考え、学校に登校することが難しくなるのではないのでしょうか。



(田邊副会長)

ここにいらっしゃる方にも担任をされている方がいらっしゃると思いますが、担任の目から見て、どのように受け止められているのでしょうか。

(高村)

実を言うと久し振りの担任なのです。ご家庭と連絡を取り、遅刻はしても学校には足がむくように継続した声掛けを行っています。経過を一人ひとり見ていくしか方法はないのだと思います。周りに合わせるということのはどのような場面でも求められてしまうものなのだと思います。本人にとって「苦しい」と思った時に間髪入れず、できる限り手を差し伸べていく体制を取っていきたいと考えています。それは私に限らずご家庭にも当てはまることだと考えていますので、ご家庭との連絡を密にとりながら取り組んでいる最中です。

(田邊副会長)

全体としては保健室登校を含めどの程度いるのでしょうか。

(木下)

一年を通してではないですが、年間2～3人はおります。なかなか教室に復帰できない生徒は、一定数います。また、進路変更した生徒も一定数います。

(坂本)

こちらから様々な手立てをとる前に、こんなに簡単にやめてしまっていていいのかという位、早々に決断を下す生徒も多い状況です。あらゆる手を尽くして、努力をし、どうしてもやむなく転学という例はこれまでも多くありましたが、そのような例とは違ってきています。

(芥川委員)

先ほど、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー配置の説明がありましたが、生徒自身や保護者の方々の相談は増えていますか。

(木下)

件数は増えています。一昨年までは本校は拠点校ではなかったので、年間50件程でしたが、昨年はスクールカウンセラーへの相談が69件でした。ただ、生徒が不登校になってしまいますと、本人が登校してカウンセリングを受けるというできなくなります。この場合、保護者の方がカウンセラーさんと相談をするということになります。

(芥川委員)

親子がしっかりと話し合い考え抜いた挙句の決断ならばよいのですが、実際は、子どもがそのように決めたから親が「じゃあ」と短絡的に受け入れるパターンもあるのではないのでしょうか。以前よりも友人関係や親子関係が希薄な中で決断を進めているのではないかなと思います。

(田邊副会長)

具体的な目標達成のためのPDCAサイクルはどうでしょうか。具体的な目標を出すとプレッシャーとなり、組織として硬直化すると批判的に言う人もいます。しかし、具体的な目標を設定することによって、自らの方向性が決まるわけです。失敗することはいくらでもあるわけですが、失敗しては駄目だと考えるとPDCAが成り立ち

ません。あくまで、失敗を前提にしながら、かつ成功も出てくるような課題を設定しながら組織運営を行っていく。これを繰り返すことで取組みが生きてくるのではないのでしょうか。そして、クリアしたら次の目標を立てるということを、繰り返すことです。生徒支援の問題についても、組織として具体的に何をやっていくのか、それが生徒に対して効果的であったか自らチェックする必要があります。場合によっては、クラス替えが必要であるかなども検討し、実践してみるなど、恐れずに試みることも必要なのではないかと思います。ベテランの先生方も多いのですから、経験をもとに様々な要素が考えられるのではないかと思います。様々な形で突き詰めた議論を行い、今の生徒にとって最善の方策を組織として決め、実践してみる事が大切だと考えます。

また、環境が変化することに関しては、人間誰もプレッシャーを感じます。それを乗り越えるだけの日頃からの指導・ソーシャルトレーニングが重要だと思います。しかし、どのようにソーシャルトレーニングを行うか、具体的に一番良い方法をとと言われてもなかなか正しい答えを出すことは難しいです。個々のケースについて担任がよく把握し、養護教諭やカウンセラーと相談しながら対応し、ケース会議に繋げていくということが大切なのではないのでしょうか。ケース会議が実際に機能しているのは養護学校位なのではないかと思います。養護学校ほどのケース会議を行うことはなかなか難しいですが、それでも、深刻だと判断したらケース会議をきちんと行うべきだと考えます。色々大変だとは思いますが、どうぞよろしくをお願いします。

(岡明会長)

ちなみに、私自身は高校時代1年から2年に進級する際にクラス替えがあり、2年から3年の間はありませんでした。小学校は2年に1度、中学校は毎年でした。近年、多くの小学校では毎年クラス替えを行っているようなので、理由を伺ったところ、「学級崩壊すると困るから」というお答えでした。神奈川県高等学校では従来から毎年クラス替えを行っているのでしょうか。

(田中委員)

学校によりけりです。工業高校など学年に1クラスしかない専門科の場合は、3年間クラス替えが無いです。

(田邊副会長)

工業科などは専門科目なので、3年間クラスが変わらない方がよいということもあるようです。これを普通科に当てはめてどの程度効果があるかわかりませんが、具体的な組織論としては1つの方法ではないのでしょうか。継続すること、変えないことのリスクと変えたことのメリットの検討を行うことが重要なのではないのでしょうか。「このような理由でクラス替えをする」というのを、生徒の実情を見て学校が示す。そのような学校もあるようです。

私個人としては、人間関係が濃くなりすぎて居られないという生徒が出るよりは、変えた方がよいという考え方でいました。現在、中等教育学校六年制がその問題に一番直面しています。そのあたりを研究してみる価値があるかもしれません。

(高橋)

総合学科時代は2・3年次でクラス替えがありませんでした。普通科になり、今年度初めて2・3年次でクラス替えを行いました。理由としては、1・2年次、2・3年次で選択科目も考慮しながらクラス編成を行わないと、開講授業数が膨大になり、限られた教員数の中で時間割を組むことができなくなってしまったということがあったためです。同じような授業を選択している生徒が同じホームルームにいるようにというスタイルでクラス編成を行いました。しかし、試しにやってみて、それが本当に効果的であるのか今後考えていく必要があるのではないかと考えます。また、今後、新学習指導要領に移行した時にも同様の問題を考えていくことになると思います。

(土野委員)

私はここ3～4年ほど、仕事の中で「子どもの貧困」について研究テーマとして取り組んでいます。貧困家庭の子ども達の教育環境について研究する中で出会った様々な背後のケースが思い浮かんでしまったため、先ほどの学校を辞める話を聞く中で頭の整理ができず、発言する機会を逃しておりました。

教育現場の外野から、2つの観点を述べます。まず、「4年間の目標」の中で、「生徒の学習意欲を高める」とある部分では、それに対する取り組み方策があまり記されていないことが気にかかりました。生徒の成績を上げようとした時に、やる気がない子に「やれ」と外野から騒ぎ立ててもやらないわけで、どのようにして「意欲をつくる」かについて戦略的にやれば、面白い取り組みにつながると思います。

学校を辞めるという件や、校則の件とも共通することなのですが、以前の総合学科時代とここ数年お話を伺っていて少し変わってきたかなということの1つが、この学校に通っていることにプライドを持つ子どもの割合がもしかすると減少してきているのではなからうかということです。もちろん、学校の位置づけや時代も変化・生徒の気風の変化もあるのだと思います。成績でも、部活でもいい「清陵にいる」ということにプライドを感じるような仕掛けを上手く作り出していくとよいのではないかと考えます。一般的に、県立高校は私学と違い、歴史や伝統がある学校は別として、校風がはっきりしないというのがある意味特色だと考えています。校風がみえてくると、プライドを持ちやすいのではないかと考えます。校風を育む取り組みを長期的な視点で意識して行っていくと、理由があって辞めていく生徒はともかく、理由無くなんとなく辞めていく生徒は減らすことができるのかもしれない。

(田中委員)

土野委員がおっしゃるように、学習意欲については、確かに具体性が見えないように思います。本来は、アクティブラーニングや探究学習を通じて学習意欲を高めるのだという意識を教員が自主的・積極的に持たなければなりません。こちら側から取り組みを働きかけているのが現状です。学習意欲をどのように高めるか、文言にすると簡単ですが、なかなか具体性が難しいところです。しかし、今後我々が考えていかなければならないところだと思っています。

(土野委員)

ボランティアや探究、外部講師の導入など材料は色々あるのだと思います。そこをなんとか生徒たちの「点数をとる意欲」ではなく、「学ぶ意欲」というところに変える仕掛けを構築していただきたいです。

(田中委員)

学習意欲を高めることが最終的には「自主的な学び」や「生きる力」になっていきます。我々はただ漠然と授業を行い、点数を取らせていけばいいだろうなどと考えてはいけなと思っています。今後さらに具体的な形にしていかなければならないと考えています。

総合学科から普通科への改編を経て、校名や制服・校章を残すことができましたが、どのように「清陵」というブランドを誇らしく思えるようにするのか、どのような仕掛けをしていけばよいかというところが大切だと思っています。良い校風や学校の雰囲気、スクールアイデンティティをどのように作り、次の校長やその次につなげていけるかが私の課題です。現在の生徒会長はじめ、清陵への思いが強い生徒がいることに「伝統をつくる」ことを託したいという思いはあります。中学や塾の清陵に対するイメージは悪くありません。他校に負けない何かを作ることができればと思っています。

(芥川委員)

学校を辞める・辞めないという葛藤の中、様々な経験をするのが支えてくれます。単位取得や対価のための

ボランティアではなく、「ちょっと興味があるからちょっと行く」ことが、思いがけず自分の人生の分岐点で影響を受ける材料の1つになります。今のボランティアが、本来の意味合いとちがってしまっているところがあります。受け入れ側でも、ボランティアのありかたを作っていかなければと思います。

(岡明会長)

学校に対するプライドを持つということは難しいです。私が大学でチャペルを見ると感じるような意識は、生徒がドンドン坂を登って目にする校門の風景につながるものがあるのだと思います。無形の財産を連綿と引き継いでいくことが「清陵」ブランドにつながっていくのではないのでしょうか。

学習意欲は難しいと思います。娘と「ウェストサイド物語」を見る機会がありました。それが「ロミオとジュリエット」の翻案であることや、踊り、ギャングエイジ...と様々な知識がぶつかった時に「学び」が始まり学習意欲が起こるのではないのでしょうか。先生方で協力し、知識の横の連携をつけていただくことも有効だと思います。清陵には、「探求」で培った素地があると思います。

## (7) 閉会

(坂本)

学校が好きになり、学習に取り組む仕掛けをつくることへ様々なご意見をいただきました。

今回の目標設定への中間報告として第2回を令和元年10月26日(土)、最終報告として第3回を令和2年3月7日(土)に実施します。さらに9月の清陵祭、授業研究のご案内も都度差し上げますので、お時間があればご参観いただけたらと思います。

それでは、これをもちまして平成31年度の第1回学校運営協議会・評価部会を終了させていただきます。ありがとうございました。